



## ◆詩と批評◆第150号◆ 2020年◆春◆季刊

【特集：映画「東北おんばのうた——つなみの浜辺で」】

金野孝子 Kinno Takako

中村祥子 Nakamura Sachiko

斎藤陽子 Saito Yoko

岩渕綾子 Iwabuchi Ayako

鈴木余位 Suzuki Yoi

ケンダル・ハイツマン Kendall Heitzman

高野吾朗 Takano Goro

イナン・オネル Inan Oener

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

北野健治 Kitano Kenji

新井高子 Arai Takako

◆ ◆

### ・本・

〔詩集〕金野孝子『詩集 山吹』私家版、岩手開発産業株式会社印刷

高野吾朗『日曜日の心中』花乱社(2160円)

新井高子『ペットと織機』未知谷(2160円)

〔評論〕Kendall Heitzman『Enduring Postwar: Yasuoka Shōtarō And Literary Memory in Japan』Vanderbilt University Press (\$24.95) 新刊！

樋口良澄『船川信夫、橋上の詩学』思潮社(2916円)

〔訳詩集〕イナン・オネル訳『アタオル・ペフラモール来日記念詩集』私家版

新井高子編著『東北おんば訳 石川啄木のうた』未来社(1944円)

### ・お知らせ 1・

映画『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』(監督・鈴木余位、制作・新井高子)が完成しました！大船渡のおんば5人の花盛りです。

『読売新聞』(2020年3月10日付)、朝刊文化面で大きく取り上げされました。

大船渡の新聞『東海新報』(1月17日付)にも、詳しい紹介記事が載りました。

### ・2・

新井の新刊英訳詩集『Factory Girls』(Ed. by Jeffrey Angles, Action Books)の書評が英字新聞『Japan Times』(3月15日付)に、大きく掲載されました。

[https://www.japantimes.co.jp/culture/2020/03/14/books/factory-girls/#XofxCC\\_COgT](https://www.japantimes.co.jp/culture/2020/03/14/books/factory-girls/#XofxCC_COgT)

Poetry Society of America のサイトでも、「The Power of Protest: Three Poetry Collections from Asian Writers」として書評されました。Amazon.com、Amazon.co.jp でも購入できるようになりました。

### ・3・

樋口良澄監修冊子『「実験劇場」と唐十郎 1958-1962』(2020年3月)が刊行されました。

### ・4・

樋口の論考「唐十郎の演劇世界とアーカイヴ」が、下記の論集に掲載されました。

『芸術とアーカイヴ——ジェネティック・エンジン』(慶大アートセンター、2020年3月)

### ・5・

ケンダル・ハイツマンと新井が、八戸ブックセンターでトークをしました(1月11日)。

新井の講演会「ことははおどる」が、國學院大学で行われました(2月15日)。

### ・6・

新着のお知らせ等はミテのサイトをご覧ください。<http://www.mi-te-press.net/> (毎月20日頃更新)

【後記】映画特集を組み、監督、出演者、制作協力者、字幕訳者に書き下ろし寄稿をお願いしました。I・オネルさんから写真作品が届きました。J・アングルスさんの詩連載はお休みです。

編集：新井高子 / 発行所：ミテ・プレス / 発行日：2020年3月31日(火)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座：10090-74894051 名称)ミテノカイ

E-mail: [mite@ace.ocn.ne.jp](mailto:mite@ace.ocn.ne.jp)

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

# 悪魔祓ア

金野孝子

ピーンヤラカラア ピーンヤラカラア

笛のノート キルバできたなア

いはかん 権現さまア来つつオー

きようア元旦

此處えらでア 権現さまれ

若衆アいのペアお供に付うで

家家の悪魔祓アする由だ

爺いやーん 権現さまア来あんつオー

早く早く 縁側の戸オ開けらつせん

おがみの障子もねあんす

ほれほれ 来たぞ來たぞオー

ハアーチョイコラサア チョイコラサア

あぐまをはらいで チョイコラサア

ダダダダー しなや十足のまんまア

えんが 縁側さ ほいほりあがつて

チヨイコラサアの掛け声でニ

おがみの畠ば 跳ね歩つて

なんとオ この勢アよお

アバハハハハ ハバハハハハ

ほらほら 権現さまアよしオ

お神酒イあがりやらいせん

くひだ 藏出すの上等なお神酒でがんつオ

爺いやーん

お前さまア 法つドたりりせん

そしたえは 権現さまの 頭持ぢア

いがなり叫んだア

「おひりア　おんばア　頭ア食つてけつから」

「ねえりア達者ア居ひやよ」

「ねえりア長生きイセヒセヒセ」

若衆<sup>わざわ</sup>どに じんねア言葉アがけられや

權現<sup>ごんげん</sup>さまの大<sup>お</sup>きな口に頭ア挾まれで

ねいの眼ア 热ぐなつたア

帰つてぐ若衆<sup>わざわ</sup>どの後 すぐだア

なんたら 尊アなア

「れがり えびせぐんだア

チョイコラサア チョイコラサア

權現<sup>ごんげん</sup>わめくア

あだア 勢アゆぐ走やつたア

津波<sup>つば</sup>を流されで嵩上<sup>かさあ</sup>まわすたまんまの町<sup>まち</sup>……

枯れだ<sup>ナガ</sup>芭<sup>ハ</sup>ア風<sup>フ</sup>もゆれでんながア

權現<sup>ごんげん</sup>わまア

權現<sup>ごんげん</sup>さまア

まだ来年<sup>あそ</sup>もお世<sup>せ</sup>み申しあそす

\*注釈

おがみ（台所の次の部屋。昔の応接間、客間）、壁<sup>かべ</sup>のなす（壁<sup>かべ</sup>のやかみ）、ほいほい（寝<sup>ね</sup>）。と  
いせき）、一ヶ（一かが）、じんせき（繕<sup>しん</sup>切<sup>き</sup>な、温<sup>ぬる</sup>いたが）、がんひ（がんひ）、おひり（おひり）、  
おんば（おんば）、おは（おは）、えひ（えひ）、かのじよか（かのじよか）、なんたり（なんたり）

あがこ  
赤子の夢

中村祥子

さつとモゾモゾって目覚めだらア  
笑つてんだべが  
泣いでんだべが  
生まれがげア日<sup>ひ</sup>數<sup>すう</sup>もねえのに  
人ハアいっつに  
夢つこ見るんだべがア  
くつたびれでハアとろめいで  
面つこ寄せだまんま眠るウ  
乳<sup>ち</sup>つこ臭ア息イひつしご抱き寄せHで

わざかな身じりぎに目覚めれば  
笑つているのか  
泣いているのか  
生まれて何日も経たないのに  
人はもう  
夢を見るのか  
疲れ果ててはまどろんで  
顔を寄せたまま眠る  
乳くさい息をかき抱いて

世界の何処で戦あ続いでで  
おらアでね工誰がが殺さいで  
おらア子でね工誰がが  
戦利品になつて  
テレビあ  
三人の子達ア盾にイ  
指導者あ自爆したつて話つて

命イ吸う赤子の必死さ  
乳房つこあ  
こだえるよオに赤アぐりすいで  
熱つた血潮ア  
白え筋ンなつてほじぱすり

## 短歌

斎藤陽子

近隣に新築の家建つりへ櫛音高へ令和の空へ

捨てきれぬ孫の残したタマゴやき貧しき子らの記事読みし朝

遠き日に父の勤めた旧校舎廊下のきしみ父の声とも

亡父來たる十万億土の雪越へて不調我の夢にいくたびも

テレビにて国会中継見てゐたりとどかぬはづのやじをとぼしつ

石渕綾子

年明けに「ガガニコニン」「ガガニコニンニン」笛や太鼓は氣仙の音色

正月に「ガガニコニン」「ガガニコニンニン」獅子の頭が健康いのる

ケセン語は氣仙の風土と暮しぶりを譲し出したる固有の言葉

サンアンドレス公園の静寂に<sup>しじゆ</sup>3・11の慰靈の鐘に手を合はせけり

杖を付きあがは「下りる我を見て見知らぬ人が声かけ與ふる

## 映画をおんば訳する 鈴木余位

2018年1月に初めて大船渡を訪ねてから2年、映画『東北おんばのうた－つなみの浜辺で』

“Songs Still Sung: Voices from the Tsunami Shores”は完成した。

あけすけに言えば、はじめは映画にするつもりなどなかった。

『東北おんば訳 石川啄木のうた』（新井高子編著）の刊行報告会、および大船渡の詩人・金野孝子さんと新井さんの朗読を撮影記録するということで初めて大船渡に入った。一人で持ち運べる限り、手持ちの機材しかなかったがスーツケースをパンパンにして出かけていた。大学や講演会の資料として使えれば、との頼まれ仕事ではあったが、手を抜くつもりもなかった、むしろはじめから映画を撮りましょうと言わわれていたら撮影自体を拒んだかもしれない。もしくはもっと「震災映画」を追ってしまったかもしれない。テーマや題材を先ず染め込んで、分かりやすく見やすく、そして強く強くと。それでも、制作を通して常にその問いに揺れることになった。いつもなら取り込むこともない意見も聞いた。今まで敢えてやらなかったこともした。全く違う制作や関係性に苦痛さえ覚えた。未だにこれでよかったのかとも正直思う。その答えをこれから観客に求める、ということではなく。作り手として絶対的に。あの日に見た報道映像にどれほど抗えるか、もしくは拭えるかと、幾度も思ったはずだった。それでも、初めて金野さんの朗読を目前で聞いた時、声色がそのままフィルムを染めるように、この土地が色づいて延びてゆく感じがした。それはどこか、リュミエール兄弟の「壁の破壊」、を間違えて反転上映してしまった、あの巻き戻しを思わせた。しかもそれは壁が破壊される直前ではなく、それよりもずっと前へ。不思議な感慨の中で、それでもいまここで歌っている現在にしがみつくように、手持ちカメラを目一杯ズームしていた。こういうクロースアップがあるんだなと我ながらに思った。それから、大船渡に通う度に出会ったおんばたちは、おなじ土地でそれぞれにちがう土地を拓いてくれた。記録のための聞き取りは、インタビューというよりも人生の朗読としてフレームに映ってきた。撮ろうとすればこそはあるが、これほどに「映ってくる」という経験はあまりなかった。撮影を敢えて撮映と書き間違えたい。この映画に対する僕の態度は正にここに終始することになる。やってやろうという立地は極力排していく、それは無欲や謙虚とは全く違う。「撮る」「見せる」の映像の基本に、むしろラディカルな思考をも生んでいた。聞き役としての新井さんをフレームに含んだのも今思えばそうだろう。インサートカットもなるだけ避けたかった。それでも80年の人生を80年の映画にすることはできない。ダイレクトシネマ等の手法に倣うつもりにならなかったのも、あのレンズを引っ張りだされたクロースアップの経験と、声を映やした土地に生き続けたおんばたちの語り=朗読、そして人生の翻訳=おんば訳への気づき故だろう。なんどもなんども繰り返しすべてを見返していくうちに、事実の記録や継承以上にこの翻し方の可笑しみや切実さがどうしようもなく愛しく、映ってきた。おんばのいない景色さえおんば訳されていくように見えてきた時、できるかもと思った。また、三浦不二子さんの坂道を帰る後ろ姿。あのショットがなければ映画にはならなかった。したくならなかった。別れ際に握手を求められた、不二子さんのあの手の温もりがなければ、僕はあの後ろ姿を追いかけなかっただろう。質や形式よりも、おんばの温度で満たすことを。震災ドキュメンタリーではなく、海の、土地の、時間のおんば訳として。翻る、おんばの舞いも合わせて、うたとして。差し出したいと思います、あがらっせ、あがらっせ。

## 字幕の実話 —『Songs Still Sung』のために

ケンダル・ハイツマン

最初は新井さんも知らない話だ。アイオワ大学国際創作プログラムへの招待には、決まったプロセスがない。国によって、提供している基金・財団によって、年によって、全然違うプロセスになる。新井さんはかなり複雑なアメリカ国務省の奨学金のプロセスで選ばれ、それには相当の時間がかかった。前の作家と同じように、新井さんの作品についても翻訳の授業を行おうと思ったが、もう間に合わなさそうだった。アイオワ大学では、授業のかなり前にシラバスを決めるので、急に一コマを追加するのも面倒だ。事務所の担当者に「特別な授業なら許されるはずなので、ちょっと変わった時間帯にしたらどうか」と言われ、結局、通常では、15週間の授業を10週間に短縮して、その代わりに、学生に、授業以外に特別な「何か」をさせると約束した。じつは、スケジュールのその厳しさのおかげで、学生と一緒に字幕を作る余裕が生まれた。

2019年の初夏に日本で初めて新井さんと会った時、大船渡の映画についての話を聞いた。字幕を作るのは楽しい活動だし、学生にとって刺激的なプロジェクトになるのではないかと思って、何気なくその提案をした。

それから8月に、新井さん、鈴木監督と一緒に大船渡に行き、関係者だけの小さな上映会で、ドキュメンタリー映画の最初のバージョンを見た。分かりにくかったが、たしかに、新井さんは、「おんば」とその地域の「気仙語」について話しており、おんばたちは、自分の人生について話していた。子供の時の話、戦時中の話を、すると話していた。「気仙語」がそんなに早く話されるものだということを知らなかった。

自分の大切な話を、新井さんに必死に伝えているおんば。気仙語の細やかなニュアンスについての話。啄木の詩、おんばの詩もたくさんあった。本当に字幕が作れるかどうか心配になってきた。

映画の言葉を文字起こししたデータをもらって、学生に配った。そして、それぞれのグループに「マイおんば」を与えた。つまり、グループごとに、担当のおんばを振りあてた。学生たちは、何回も、そのおんばの話を聞いたり、読んだり、翻訳したりするうち、会ったことがな

いのに、おんばたちに親しみを感じるようになった。それは、私の狙い通りだった。「自分のおんば」のために、苦労して取り組んだ。

存命中の方を学生に譲って、撮影後に亡くなったおんば、不二子さんの部分を、私は自分で翻訳した。最初に見た時は、分からぬ方言がたくさんあるせいか、他のおんばほど、暗くはない話だと思い込んでいた。始終、笑ったり冗談をけしかけたりしている人なので。しかし、字幕を作りながら、どのぐらい大変な話をしていたかということが分かつてきた。

不二子さんは非常に複雑な人。能天気そうなふるまいの内側で、人生の大変さがよくわかっている。例えば、亡くなった恋人について、不二子さんは「一生忘れねえでおぐべーど思ったつたども、忘れてしまって、(他の)人と一緒になったの。」と曖昧な口調で告白する。恋人について、その時の自分について、どう思うか、自分でもはつきり言えなかつたのだろう。

その若い時の経験があったにもかかわらず、不二子さんは陽気な人になったと考えればいいのか、それとも、その経験があったからこそ、このような性格ができたと考えればいいのか、どちらだろう。新井さんが海についてどう思うか聞くと、不二子さんは「すぐ前は海だったもの」と答える。表面上はぶっきらぼうだが、実は、その答えは、海のように深い。

一体、どうやってそれを英語に翻訳すればいいのか。そう考えながら、私は不二子さんと同盟を組んだ。英語の字幕を書いては消し、また書き直した。このインタビューは不二子さんの人生の凝縮で、その上、字幕は、さらにその凝縮の凝縮になる。それぞれの瞬間で、非常に複雑な気持ちが伝えられる英語の言葉を探った。

アイオワでの上映の時、観客は時々、暗い話を聞いて笑っていた。時々、賑やかな場面を割と静かに見ていた。空気が読めなかったとか、字幕にミスがあったとかではない。おんばたちの話を聞くと、気持ちが氾濫するということではないかと思う。確かに、人生にはそんな違和感がある。

あの世の不二子さんが観客の反応を見たら、「そんな感じだよね」と言うかもしれない。この世で会ったことがないのに、映画の字幕の仕事を通じて、彼女と親しくなれた。



イナン・オネル写真「新宿御苑」(2020年2月)

## 月と太陽の対話

高野吾朗

この扉の外は真空の世界 だから鍵をかけて立てこもるのだ  
「この部屋に今日も引きこもるあの子の 心の鍵はどこだ」  
扉の外のあの声が 次に殺処分したがっているのは私らしい  
「この中で独り老いゆくわが子こそ 私の人生の屠殺者だ」  
窓から射すこの光の海の中にいる限り 私は永遠に大丈夫だ  
「暗いこの廊下から察するに あの子はまるで溺死寸前だ」  
自分のことは自分で守るしかない 家族さえも今は敵なのだ  
「子供のための自己犠牲 昔はそれを神の恩寵と信じたが」  
今日もスケッチ帳を開いて 気ままに絵を描いて過ごすのだ  
「今日は人生最後の皆既日食 全てを忘れて独りで見たい」  
眠りながら描くかのように この手の動きに全てを任せよう  
「眠りながら歩くかのように この足に行き先を任せたい」  
扉の外が静かになった 無償の愛を訴える あの声が止んだ  
「この扉を無理に開けたところで 待つのはどうせ暴力だ」  
旅する獣をまず描こう 野に晒され 獣の心には風が沁みる  
「家を後にした今日の私は旅人だ そして空は時雨模様だ」  
旅に病みそうになりつつも 獣は枯野を夢のごとく疾走する  
「子をしばし忘れ 旅立つ私 鳥は啼き 魚の目には涙だ」  
獣の巨体に衝突 または踏み潰されて 数々の小動物が死ぬ  
「しばらく歩くと 大きな袋を重たげに背負った男がいた」  
全速力の獣の後ろには 獣に殺された動物たちの靈を描こう  
「男によると 袋の中身は死体で 彼の子供なのだそうだ」  
靈たちが見せる奇妙なダンスは あの獣を呪い殺すがための  
「わたしと違い 男は 行き先も帰る場所もない漂泊者で」  
そして自分らを蘇らせるためのもので それを知らないのは  
「子の死体にはまだ血が通い 生者そっくりなのだという」  
前を行く獣本人だけだ さらに駆ける獣の前に描かれるのは  
「男が言うには その奇跡の子はきっと聖人のはずであり」  
人間の幼児だ その子は車道のそばに立ち 反対側の歩道を  
「それが公式に証明されれば 多くの心を救うはずだから」  
見ている 反対側にはひとりの大人が背を向けて立っている  
「自分がずっと信仰している宗教の教祖を訪ね その方に」  
顔の見えぬその大人を 自分の親だと信じ 幼児はいきなり

「聖人と公認してもらいたいのだが 何度行っても断られ」  
信号のない車道を 左右を確かめぬまま 渡ろうと飛び出す  
「気づくといつの間にか 膨大な月日が経ったのだという」  
それを見た獣は迷う あれは 自分とは違う世界の生き物だ  
「会って下さるまで 自分が死ぬ日まで 訪問は続けると」  
だから救う必要はないはず だが 苦境の只中にあるものに  
「笑いながら言って去る男の背中が 私には聖人に見えた」  
手を差し伸べるのは当然では 車道に獣が飛び出すると 車が  
「皆既日食が見える丘まで エッシャーの騙し絵のような」  
獣か幼児のどちらかを轢き 内臓が路上に飛び散る 幼児の  
「街をさらに進むと 旅人を殺してその肉を食らうという」  
顔を どうして私は私そっくりに描くのだろう 鳥の群れが  
「老いた女の鬼と出会った 彼女の周りには人骨と内臓が」  
早くも上空から路上の内臓を狙う 行きかうどの車も その  
「山のように積まれていた その鬼がわんわん泣いている」  
死のために停まることはない どの通行人も気づかぬままだ  
「どうしたのかと尋ねると はるか昔に 置き去りにした」  
轢かれるその瞬間 幼児の脳裏にも 獣の脳裏にも 音楽の  
「わが子と気づかぬまま 先ほど旅人を殺し食ったという」  
爆弾が破裂する スケッチ帳の残りの余白があらゆる音符で  
「誰かこの音楽を止めてくれと泣き叫ぶ 鬼に別れを告げ」  
埋め尽くされて 私はようやく全てに飽きてしまう すでに  
「私はようやく丘の頂へとたどりつく すでに太陽が月に」  
光の海は消え去らんとしており 窓の外には 暗黒の世界が  
「覆われようとしているのに この決定的瞬間に なぜか」  
その色を濃くしあげる 言い知れぬ恐怖に 私は 思わず  
「私を除いて 丘は無人だ ああ あの月と太陽のように」  
着衣のまま 失禁してしまう ああ あの月と太陽のように  
「私の世界とわが子の世界が 再び重なる瞬間が いつか」  
私の世界が 扉の外の世界によって再び覆いつくされる日が  
「来てくれるだろうか すると漆黒の闇の中から 誰かが」  
来るのだろうか すると再び 誰かが扉を静かにノックする  
「囁く ここに花が咲いているのがわかるか 二つの命の」  
そしてこう囁く 君の世界を無限にしたいのなら 扉の外の  
「中にあるこの花が見えるかと 私の両足が丘を下りだす」  
無を この得体の知れぬ世界を 扉を開けて迎え入れるのだ

新井高子

波の手だちア伸びてきや、わひねひねひね、貝ひいバ撫でるんやア、ちイシと温めるもんだイ  
ねえ、だれだつて。イエネ、出るがでよよ、「」のあたりにア。

\*

「いだかあ、いだかあ」若死にした嬢さんが、家の戸おベ叩くがですよ、毎晩毎夜、ノ亭主たず  
ねや。わいは後妻の娶るでねアベが、未練の残つとつたとでしよう。三十路の耐まらん女だつ  
たよ、子宝の欲じぐで、欲しくや。「ひだよお、いだよお」夫のその声聞いたれば、ぞわぞわと帰  
アツたつてえ。せづねアなあ。

ある夕、旅の男のやつて来て、「泊めでけりせん。峠バ越えらイねえでして」。お人良しの亭主  
だアもの、酌みかわす酒びん借りに由やつたつてえ。

その隙のいじりでした。

「いだかあ、いだかあ」甘いイ声ソコいだします。男アだんまりしておらまわよ、「いだかあ、  
いだかあ」、わし迎ひた声色で、口べ叩ぐ。色だばか、ハジの主の。その顔、揉んでみだアなる  
のが人情にいせえませんか。燃ゆるがいとくの「いだかあ、いだかあ」。アイヤア、まつさが激し  
イ恋路のあるよつなあ、ハゲな田舎で。粗末な板戸バ、ズ、ズズツとオツ引きやア、

おおつたつぎやア、

でつけア女の品物が、

ハナず開けた赤貝のドデシゲヤアのが、ぶうぶうぶうぶうと打ぢ震え。どうぶうぶうぶうとその口からは  
潮汁。タマシイみでアに宙浮がんでおるがアよお、品物だけが。「いねかア、いねかア」、ほう  
しり、口の端、引き攣る、ハアハアハアハア壁ぐたんびに、その容態の崩ふんや、

叫んで逃げたア言つまでもねアがしょう。「いねかア、いねかア」、追ッ掛けだアも言つまでもねア  
がしょう。息の切れでも男ア馳せで、馳せ、馳せ、馳せで、もういねアベと振り向きやア、  
追おつてくるがや、

火の玉みだアに、

ぎゅんぎゅん陰毛バ靡かして、ハアハアその口おひ開き、ひん剥いで。  
しまいた、海辺サ逃シ詰めりやア、さでも膨らんで、化け物は膨らみ、膨らみ、夕空みでアに膨ら

みだくし

金のいわゆつたて山がやむねへだしみへ。

駆せだいひ 駆せだいひ

起きへりぐや

たまたま西へただひだひ

喰ひわいる

すんぬつ

こせ

こせ

起きへりねぬるや。

たまたま西へくや

膨張ひむほつへが

増殖ひむほつへ。

蔓延ひむほつへ。

\*

波の手だちア仲びトモヘ、わのねぬひね、流れ木バ撫やんぬかや、何故に骨サ松ヘぬくか、  
思わんものアシナアガシヌ。

\* 「似たり眞」(佐々木徳天『正説・みのりへ鑑美譜』(ひかり書房、一九七九年)所収から感を得ました。

## 問い合わせと向こう側

北野健治

「リアル」であるかどうか。それは、私が作品に向き合った時の基準。この連載で、何度もそのことについては触れてきた。「リアル」が事実とは相が異なることも。表現者なら、誰しもそれを意識しているかどうかは分からぬ。ジャンルによつても、意識の仕方は違うだろう。今、放映中のNHKの朝ドラの陶芸の世界でも、やはり「リアル」かどうかは、あると思う。そして、その作品がいつも「リアル」な作家はある。

その一人に、映画監督のケン・ローチがいる。彼の作品の大半は、イギリスのブルーカラーの人々を描いている。初期の作品『ケス』の主人公の少年の、廢坑の街の労働者の息子をはじめとし、2度目のペルドームを受賞し、それを機に引退表明した『わたしは、ダニエル・グレイク』（以下、『ダニエル』）の主人公も心臓に疾患のある大工だった。その後が、またしても前言を翻し（というのは、『ダニエル』の前の作品の際にも、引退表明していたから）、『家族を想うとき』（※①）を監督した。

元建設労働者だった主人公は、職を失い、安定した生活を得るために、配達会社と個人オーナー契約の歩合制の配達ドライバーになる。配達車は、会社から借りるよりも、自前で用意したほうが収入は良くなる。そのために、唯一の財産ともいえる介護士の妻の車を売つて、その資金を頭金にして手に入れる。幸先よくスタートを切るが、その労働内容は朝から晩まで。休む間もない。一方で、車を失つた妻は、バスで点々とある介護先に出向かざるを得なくなる。

夫婦には、二人の子供がいる。16歳の反抗期の息子とまだ親離れのできない12歳の娘。どちらも両親とのスキンシップが大切な時期にもかかわらず、仕事の都合でそれ違い始める。そんな日常の小さなエピソードが積み重なっていく。

印象的なエピソードがひとつ。ある夜、主人公と喧嘩した息子が家を飛び出す。その翌朝に、配達車のキーがない。出勤できぬ主人公は、会社に欠勤の連絡をし、ペナルティーの罰金を科せられる。息子の名を叫び、毒づく彼。物語の後半、キーを隠したのは娘だったことが、彼女の告白で判明する。そうすれば、父親に家にいてもらえて、かつての家族に戻れる、と思つたから。

映画の原題は、配達不在票に書かれているメッセージ。「不在につき失礼」（※②）というものが。

ひび割れていた家族のかたちが、どうにか元に戻ろうとした矢先、主人公が配達途中で暴漢に襲われる。品物が奪われ、会社支給の品物管理用通信機器が壊され、怪我を負う。品物・機器の弁償、欠勤とペナルティー金額が積みあがつていく。それは、彼にとって絶望的な数字だ。

翌朝、無謀にも車を動かそうとする傷だらけの彼。家族は、身体を張つて車の前に立ちはだかり、阻止しようとする。それを振り切つて、彼は車を走り出させる。朝陽のきらめきの中、涙をぬぐうことなくハンドルを握り続ける主人公のシーンで映画は終わる。

映画を観終わつて、遅まきながらに気づいたことがある。それは、ケン・ローチの映画のテーマは、「怒り」だということ。彼が、どんなジャンルの映画を撮つても、ブレない。時代や社会が異なつたとしても、「眞つ当」なことが報いられないことへの「怒り」。それをどう受け止めるのかを観客は問われている。言つてみれば、「問い合わせ」のリアルだ。

彫刻家・青木野枝の個展を府中市美術館に観に行く。「霧と山と鉄と」（※③）と題された展覧会は、美術館のエントランスから始まつてゐる（※④）。

10メートルの高さの吹き抜けの空間には、まずはテーブル状の台座に置かれた、色とりどりの使いかけの石鹼を積み重ねたトーテムのような柱状の作品を配列した『立山／府中』（※⑤）。さらには、高さ7メートルを超す長細い円錐形の鉄棒の骨組みの塔に、半透明な波型アラスチック板を垂らした2体の『霧と山・丘』（※⑥）が展示されている。そのスケール観の違いが、かえつて両作品に相通じるテーマを際立たせる。会場の入口には、身の丈より少し大きい鉄棒で構成されたさまざまな円錐形の塔『untitled』（※⑦）が林立。まるでこれから分け入る山の裾野に広が

る林のようだ。

四つのゾーンに分けられた展覧会は、各ゾーンに大作が1・2点で構成されている。ゆつたりとした会場構成が、彼女の作品の魅力と特長を引き出している。企画展示室1には、輪のかたちに切り出された鉄板を、十字型に交叉させた球形で山のかたちに積み上げた『霧と鉄と山』(※⑧)が鎮座する。と語ると重々しいが、実際には存在感はありながら、重みを感じさせず、どんか突き抜けている。その特質は、他の作品も同じ。

企画展示室2には、石膏でかたどられた、お椀を伏せたような塊が、ひとりがすり抜けられるぐらいの間隔を空けて2体展示。『雲天I』『雲天II』(※⑨)と名付けられた作品も、やはり重みを感じさせない。そこには、存在感のリアルさだけが漂っている。

会場の最終室には、彼女のドローリングとともに、スケッチブックが展示されている。そのス

ケッチブックの中に、うろ覚えだが、次のような内容のメモ書きがあった。

「山は、聖地とか神様がいるところというのではなく、向こう側」

彼女の独特な表現が、「私にある」とを思い出す。かつてキュレーターのヤン・フートは、アートが成り立つ条件は、その作品がアナムネーションの要素を持つているかどうかだと語った。アナムネーションとは、「想起」と訳出されるプラトン哲学の用語。現実界を超えた本質のみで構成されたイデア界の、目の前の対象物が分有しているイデアを想い出すこと。

このときのポイントは、イデアが意味するのは、抽象的な謂いだといふ。例えは、「二角形のものを見て、三角形だと分かるのは、三(二)角形」のイデアを想起しているから。(つまり「美」が成立するのは、目の前のものが「美」のイデアを分有しているかによる。青木の作品が成立するのは、「山」という「向こう側」にあるものを分有し、かたちに顯れているからだ。

年明け早々に、新聞の計報欄である名前を見止める。「大野慶人」。舞踏家であり、スタイルは違えども、土方巽の正統な後継者だった。父が同じ舞踏家の大野一雄だったこともあり、一時期は自身のスタイルの確立に悩んだこともある。が、年齢を重ねるにつれ、それは確固たるものに深化していく。

氏の舞踏の中でも、特に私が愛していたものは、指人形を使ったもの。指人形を使つたもの。指人形と侮る」となけれ、そこには一人の人格を持った舞踏があつた。DVDでしか観たことはないが、掌の、指の舞でありながら、それは等身大以上のスケールの大きなものだった。あまりの美しさに、何度も胸を打ち震わせたことか。それもまた、向こう側を想い出させる、リアルな舞踏だった。もう一度とみるとできないと思うと胸が痛む。合掌。

怒り、山、指人形。リアルは、身近などにある。それに気づくか、かたちにできるか。アプローチや表現方法は、限りなくある。重要なことは、それを引き受ける覚悟があるか。だからこそ、その行為は「美しい」。

#### (註)

① 原題『Sorry We Missed You』、脚督：ケン・ローチ、2019年／イギリス・フランス・ベルギー／100分、配給：ロングライド

② Wikipedia 「ケン・ローチ」 参照

会期：2019年12月14日～2020年3月1日

④ 展覧会についてのデータは、「青木野枝 霧と鉄と山」記録集（発行：府中市美術館、発行日：2020年1月31日）を参照

⑤ 2019年／鉄、石鹼／高さ111cm、200×90cm（以下、サイズはcmを略）、注：このサイズは、青木の鉄棒のテーブル状の台座を含んでいる。台座の上には、約30kgの石鹼の柱状のものが、4×5列に配置されている。

⑥ 2019年／鉄、波板／高さ720、底面直径240

⑦ 1981年／鉄（丸鋼）、95cm×200cm×220cm、底面直径23～47（2個）

⑧ 2019年／鉄、ガラス、波板／高さ450、底面直径600

⑨ 2019年／石膏、麻布、新聞紙、鉄／[一] 高さ270、300×270／[H] 高さ270、344×280

## The Sick Period

トルが「反転すれば、国家に動員されるかつての戦争期と同じになるわけで、共通する構造の下にある」ふをあらためて感じざるを得ない。パンデミック終焉後、国家の力はより強大になるだろう。

### 樋口良澄

「これはすでに書いた」。だが、『スペクトラム』の冒頭には、the sick period 「病いの時代」というヒグラフがついている。現在の新型肺炎の世界的蔓延は、この言葉を使えば、まさに時代は the sick period に入ったのかもしれない。もちろんヒグラフは、ヨーロッパの第一次大戦後の荒廃と、その中で流動する人間精神を示しているのだが、第一次大戦末期の一九一八年には、「スペイン風邪」と名付けられたインフルエンザの大流行があった。ちょうど百年前、一九一八年から二〇年にかけ三波にわたり、世界全体で五億人が罹患し、死者も數千万人に及んだこの流行は、アボリネールやエゴン・シーレ、クリムト、といった私たちが知る芸術家の命も奪っている。西脇がロンドンに到着した一九一二年は、世界戦争とともにこの病の記憶は生々しかつたはずだ。

戦争下の劣悪な衛生状態、栄養状態が蔓延を加速させたと言われ、長期の斬壕戦を戦った兵士が罹患し、帰還して周囲にさらに広まるという事態に至つたが、情報は伏せられた。戦争下に士気が低下するのを恐れたからだが、それがまた感染を拡大させた。スペインは中立国であったため、この病の拡大について盛んに報道した結果、「スペイン風邪」と名付けられてしまつたという。日本でも約二千万人が罹患し、村山槐多はこの病が原因で一九一九年に二二歳の若さで亡くなっている。

まだウイルスの存在は発見されておらず、当時の人々は恐怖に襲われただろうが、百年後の私たちはどうだろうか。二〇一九年末に中国・武漢から始まった新型肺炎は三ヶ月の間に全世界に広まり、三月末の時点で世界の患者数は五十万人を超えた。治療法が無いため、感染を食い止めるには、接触を避ける方法として外出禁止や国境封鎖の措置をとるしかない。まさに戦争状態だが、世界規模で広がるウイルスへの対抗戦略は、国家が主体となって実行されている。グローバル時代に、古典的とも言える国家の復権で、二十一世紀を切り開くとされたグローバル企業もその構造下に入れる。外出自粛の街で家にこもっていると、自粛のベク

トルが「反転すれば、国家に動員されるかつての戦争期と同じになるわけで、共通する構造の下にある」ふをあらためて感じざるを得ない。パンデミック終焉後、国家の力はより強大になるだろう。

西脇は病いについて、「病気になると自然といふ中に入つてゆく気がする。暗黒な暗い肉体の中だけで住んでいる気がする。とにかく自然是光明ではない」（単純な樂器の世界）、一九三一年）と帰国後に書いている。病いも自然の多様な姿であるという認識だが、それが「即ち原始的になり、土人の世界になりたい」と思う。（勿論僕自身土人であるが、いわば他の種類の土人になりたいと思うことである）。先ずギリシアのリリクが好きになる」（同）と書いている。「他の種類の土人」とは、古代ギリシャ人を指すようだが、このエッセイを発表した同年に刊行した『Ambarvalia』の世界そのものである。この当時には、「病いを「自然」に帰るきっかけ——それは彼の考えでは自分の中にある原始性を指すのだが——と考えていた。

ペストやコレラや結核、人類は何度となく疫病に襲われてきた。西脇が書くように、人類もまた自然の一部であり、病気も自然の多様性の一つを表しているとも言えよう。現在のコロナ・ウイルスの脅威も、そう考えれば歴史に学ぶことができる。昨年末に武漢でのウイルスが発見された時、多くの人（国）はSARSを連想したが、実は参照されるべきはスペイン風邪のようだ。だとすれば、蔓延は一年以上の長期にわたるだろう。

『スペクトラム』には、しばしば「病んだ」(SICK)という形容詞が登場する。「疲れた」「淋しい」といった形容詞も含めれば、「病い」はこの詩集の通奏低音と考えていいのではないか。それはネガティブな意味には止まらない。そもそも『スペクトラム』冒頭の「アンズ先生」からして「疲れた」魂をめぐる作品だった。

魂は歩いているけど、倒れるかも  
疲れているから夢は咳き込み  
星々はラクダの記憶を持つている

倒れそなほど疲れても、咳き込んでしまってどの「夢」があり、天空の星には「ラクダ」という、これまで遠い記憶が結びついている。「疲れ」は魂を停滞させはしない。魂の多様な状態の一つであり、西脇の言葉で言えば、存在の「スペクトラム」の一つなのである。

もう少し田にぐくものを取り上げてみよう。

### 病める手

夏の雨が プラチナの首飾りを

緑の山にほおって 遊んでる

皆既日食の間 野ユリは

白鳥の首のように 香りたつ泉の下で 横たわって

いた

小ガニが赤岩から歩き出す

次々と落ちる桃が タンバリンを鳴らすよへば

果樹園の下で 石のように眠っている 兵士たちを

起こす

小さな家の中で青ざめた手がヴァイオリンを取り上げ

遠い昔の晴れた空を歌おうとする

ああ 疲れた病んだ手よ

甘い石を集めて

お前の両親に客車で送つてやれ

「これ」を望郷の詩と理解する、「もしもやさむ。しかし、

「」には夏の雨、野ユリ、桃が心象の中でもう、めいて

いる。望郷は過去を省みる単純なノスタルジーでは無い。

い。

二人の老いた運搬人が

僕の顔の神経を見にきてしやべりかけた

そして紅茶が苦すぎるといつた

何も僕の病んだ魂をよろこばしてくれない

道が坂の上で曲がっていた

歩いてきた友人が立ち止まって

ウインドウ越しに

新着の帽子を見ている

(「リッチモンドで」一部)

リッチモンドはテムズ河畔の街。西脇は散策に訪れたようだ。「これもある種の孤独を書いた作品だろう。しかし、単純では無く」「僕」の周りには様々なものが移ろつていく。

「病い」は時に「」のように躍動して描かれたからである。

僕の紫の水差しとヴァン・ゴッホの椅子  
銃のガン、ガン、ガンだ!

### 存在の淋しさ

僕の魂は木の端みじんに吹き飛ばされた  
それを集めて

君の赤く上気した頬に吹き付けてやるう

君の輝きによつて、パンケーキになれ!

前回取り上げた「ナイト・ソングズ」。プリズムは光を曲げて、光のスペクトラムを発生させる装置。存在は「淋しさ」と銃のガンガンという発射音の間にある。ダンスするような躍動の言葉。「」に『スペクトラム』の魅力がある。多様なもの躍動を、原始／近代という時間的構造のなかで理解しようとするのは、帰国後の古代研究を経た後である。

(続く)

\*西脇順二郎『Spectrum』の翻訳に際し、著作権継承者の西脇順一氏の許諾を得、ジョフリー・アングルス氏の協力を得ました。

君のプリズムが僕のカーテンの上で 南国のダンスをする

## 扇子と夢

——映画『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』を企画制作して

新井高子

映画ができた。とんでもない」ふたたび。しかも、英語字幕付きだ。

拙著『東北おんば訳 石川啄木のうた』の企画を通じて、親しくなった大船渡のおんばたち。何らかの形で、その豊かなつき合いをわたしは続けたかった。

映像が選ばれたきっかけは、東京での出版記念イベント。じつは、当初はおんばを招きたいと思っていたのだが、人混みも階段も多い東京。何かあつたら取り返しがつかない。そこで、かつてジエフリー・アングルスさんとわたしの日英ペイリンガル詩朗読映画『ヴォイス・シャドウズ』(1991年)を作品化してくれた監督、朗読映像のスペシャリストでもある友人の鈴木余位さんに、おんば訳朗読と大船渡での出版記念会を撮影してもらえないかと打診。わたしのケセン語の師匠、金野孝子さん、そして大船渡での企画すべての同伴者、中村桂子さんにも相談するとともに快諾。まずは、じぶんの授業や催しのために、おんばとおんば訳を紹介する短い映像をわたしは必要としただけだった。

本の出版に心残りもあった。訳の協力者を「東北おんば」とひと括りにしたこと。総勢五十人近いみなさんの知恵を統べた訳ゆえ、そうするしかなかったが、お一人、お一人に注目する「」ことも大事だと思った。いや、自然に、それぞれの人生をわたしは知りたくなっていた。類は友を呼ぶ。特に親しくなったみなさんの多くは、「自身でも詩や短歌を書く。

そこで、生い立ちや津波の体験、ケセン弁の魅力についてわたくしが尋ねるインタビューをベースにしながら、おんばがشتたためた詩歌、さらにおんば訳啄木短歌などを挿入する映画を作るはどうか……。新幹線を乗降する水沢江刺と大船渡の間を鈴木さんと往復する車中で、そんな夢物語が始まった。

だが、そのときの映画とは、限りなく記録映像に近いものだった。いや、二つの違いさえ気にせず、半ばホラ話をわたしは打ち上げたのだが、インタビューを始めてみると、おんばの人生の厚みに驚愕。その内容はぜひとも映画で、覗いただきたいが、七九歳から一〇〇歳までの五名、今野スミノさん、三浦不二子さん、岩瀬綾子さん、金野孝子さん、斎藤陽子さん、それぞれがまさしく近現代史のかたまり。年齢を重ねることは、一人一人が個性的になることなのだと気がつく。

生涯をかけて育むケセン弁が各自で違うのと同じように、自

然なたたずまいの中に、それぞれの輝きと含蓄がある。

津波という災禍、それを生き抜いた女たち。さながら一体化していくと言つていいほど、親密な土地との絆を通して、彼女らが見えたもの、からだで感じてきたことは、より強烈になる。新型コロナウイルスという世界的災禍が襲来したいま、この映画が孕む朗らかな知恵は、さらに普遍的になったとさえ思つ。ただともあれ、じぶんの授業だけでなく、もう少し広く上映するものにできたらと、わたしが切実に思いはじめたのは、それでもすべてを収録した後、1991年に入つてからだった。

そこへ、アイオワ大学国際創作プログラム(IWP)からの招待。渡航前の昨年六月、同大准教授のケンダル・ハイツマンさんと横浜で昼飯を食べながら、この件を打ち明けると、「それは面白い。英語字幕を作つて、アイオワ大学で上映しましよう」。会食後、鈴木さんにすぐ電話して了解を得たのは言うまでもない。

そもそも大変だつたことだろう。ひとりの「映画」をつくるのは並大抵のことではない。わたしの学生向けの記録映像でよかつたはずが、十一月にアメリカで上映する作品に向かって漕ぎ出した。撮影と同様、編集も字幕入力も、鈴木さんが一人でなし遂げた。

八月、映像チェックを兼ねて、大船渡で出演のみなさんと小さな仮上映会をしたあとには、わたしからいろいろなお願いもした。独自の方針でアート系の映像表現をしてきた鈴木さんにとつて、納得のいかない注文もあつたことだらう。わたしの要望は、しまいには、「おばあちゃんの友達が見ても、よかつたと思える映画に」と膨張したのだから。

それらを鈴木さんは真摯に受け止めてくれた。その纖細な眼差しが、透明な光のようにおんばを包む。つかの間に過ぎないインタビューから長い人生を浮かび上がらせた編集、詩歌朗誦の插入法は絶品だ。

英語字幕は、わたしのアイオワ滞在中に、ケンダルさんとその授業「日本文学翻訳演習」受講生二十名によって訳された。そのための日本語テキストで特に濃いケセン弁部分の文字起一しは、解説も含めて中村さんの手を煩わせた。

じつは、度米して授業に参加してみると、必ずしも学生全員が日本語に堪能なわけではない。十一月までに全訳をなし遂げるのは無理ではないか。わたしは心配になつた。

だが、そこで見たのは、アメリカの底力。完璧でないからこそ協力し合つて、より大きな仕事をなし遂げるアメリカン・チーム。共同作業がしやすいように、ケンダルさんは受講生を二つのグループに分けて、翻訳チームを編成。授業時間ではなく、自主的に集まって活動する各チームで 1

は、大学院生がディレクターとして学部生を引っ張る。日本からの留学生や日系人は日本語で力を貸し、歴史に興味のある人はおんばの時代を詳しく調べ、英語センスのいい人は見事な表現にそれを言い当てていく。難しいケン弁があるからこそ、チーム全員がわいわい議論し、じつに楽しそうにして進めていく。さらに、ケンダルさんは、驚くべき集中力で学生たちの歌を磨き、またじぶんのパートを説く。

アイオワ大学での上映会に百人近く押し寄せたのは、津波やおんばへの共感に加え、彼らの情熱が来場者を引き寄せたからだろう。わたしのIWP体験は、これを通してひとしきり豊かになつたが、この映画は、英語字幕も含めて「作品」。ケン弁、ハイカラ弁（おんばは標準語をそう呼ぶ）、英語弁が、それぞれ補い合つて交響する」ことが特徴の一いつとなつた。いまから思えば、ケンダルさんとの出会いが、記録を

し、映画を制作することをわたしに決定付けたと思う。別れの挨拶のとき、愛島のカオルくんが、エレベーターのドアが閉まる瞬間、「ほくたちは家族だよねー」と叫んだ声が忘れられない。おんばも含んだ震いつき口ひが、わたしの滞在を支えてくれた。

おんばは帰国後も、アイオワでの反省を踏まえ、改訂作業は続けられた。そして、2010年2月、マスタリング、パッケージングまでを含めて完成に至つた。逆境を含んだ人生語りとその土地の息吹を伝える詩歌が、ふしぎな美しさで調和した鈴木監督の力作。単なるノキュメンタリーでも、いわゆる映像詩でもない。それはそのまま織り作品。

何より、おんばたちが光りついでいる。あるIWP Writerは、「これまで、おんばは永遠になつた」とすてきな言葉をくれた。その和やかなたずまいへの感嘆を込めて、「新井さんは、どうやつて」のおばあちゃんたちを騙したんですか」と尋ねにきた観客もあつた。

思えば、みんなを騙してきた。朗読その他の撮影といふことで引張り込んだ鈴木監督には、誰より苦労と心労をかけた。そのつど確認はとつたものの、出演のおんばたちも、まさかじぶんの姿が「映画」になるとは当初は思つてもみなかつただらう。「ねほと震じ土語言葉が含まれた作品である」と、字幕をかつて出たケンダルさんは想像していなかつたはず。

四方八方へ腹積もりを抱えながら、不意にやつてくる幸運を驚きみし、扇子を開いて音頭をとるのが映画プロデューサーであるならば、その「」とをわたしは何とかしなしたのかかもしれない。心の「」かで、じつは最初から、国境を越えるおんばの映画が作りたかったんじゃないか……。大船渡に生きる女(おんば)の素晴らしさを、時代と場所を越えて伝える

ために。そういうおんばたちのそばにいるために。それが、わたしの詩作の糧でもあるのは誰つてもない。

これから上映を進めようと思つたところで新型肺炎の問題が起つたが、ともあれ完成まで漕ぎ着けてあつた」とはおしゃれまれていた。この引きこもり期をうまく使って、映画祭などに挑戦したい。

啄木短歌の土地言葉訳開始から数えて五年半。おんばは、映画の夢に集つてくださったみなさんには、この場を借りて感謝したい。監督・撮影・編集の鈴木さん、出演の今野さん、三浦さん、岩瀬さん、金野さん、斎藤さん、絶えず、おんばを支えてくれた中村さん、英語字幕のケンダルさんとその学生さん、おおらかな題字の榎本さん、映画編集に助言てくれた樋口さん、心からありがとうございました。

## \* 映画『東北おんばの「」――つなみの浜辺』

“Songs Still Sung: Voices from the Tsunami Shores”

(2010年、八〇分)

撮影・編集・監督：鈴木余位

企画・制作：新井高子

出演：今野スミ、三浦不二子、岩瀬綾子、金野孝子、斎藤陽子、新井高子、十大船渡のみなさん

制作協力：金野孝子、中村桂子、今野オワ子

企画協力：樋口良澄、中村桂子

題字：榎本了老

英語字幕：ケンダル・ハイツマン+

アイオワ大学「日本文学翻訳演習」受講学生

翻訳チームディレクター：ジョー・テロング、マック・ギル、ねね・ペーカー

翻訳者：ブランダン・ブリギー、ベラ・カルソ、ジエラームス・カミングス、ブリジット・ダンカン、浜中綾、ハイディ・ホルシャー、エマ・ジエファイソン、ケビン・リュー、グレース・マロイ、イーアン・ノーラン、ステファニー・祈り、ベラ・ロス、ケン・セルマン、ブレナ・タナー、ミケイラ・ウォーカー、クリステン・ワンポール、渡辺千晶

資料：『東北おんば訳 石川啄木の「」』新井高子編著(未  
來社、2010年)

後援：寿限無亭(岩手県大船渡市)、日本現代詩歌文学館(岩手県北上市)、埼玉大学大学院人文社会科学研究科  
アイオワ大学国際創作プログラム